

続・中川経雅の交友録

——本居太平との友情(その一)——

倉 本 昭

—

自分は先行する二本の拙文において、『経雅卿雑記』に残された寛政五年から文化年間初期までの記録を検討しながら、経雅を中心にした内宮文芸サークルの如きものを想定し、それが松坂の鈴屋社中との交流を通じて、豊かな文芸・学術活動を展開していたことを証明しようとしてきた。

文学史的、文化史的にとりわけ重要であるのは、当然経雅と本居宣長との交友関係についてである。これに関しても、自分は既に簡単な考察を経ている(『経雅卿雑記』拾遺)『近世文学研究の新展開 俳諧と小説』所収 平成十六年 べりかん社)。けれども、そこで自分がしたことは、諸先学の落穂拾いのことにすぎない。経雅と宣長との関係については、早く池山聡助氏が「本居宣長翁と中川経雅卿」(初出は『皇学』三一 昭和十年。後

に『神道古典の研究』(昭和五十九年 国書刊行会)に収める。)でまともなところであり、まずは氏の説を紹介しておくべきであろう。

大平などの著述の上梓されることに初穂の意味を以て皇大神宮の文殿あるいは林崎文庫に奉納したり、しばしばこれが仲介をなし、また一本を卿に贈り来たり、あるいはしかるべき代価を払って柏木兵助から購入した事などもしばしば日記や覚書に見えている。要するに書籍の貸借という事において互いに学問研究に相助け精進しつつあった事を看取しうれば足りる。

純然たる門人ではなくして、友人としての間柄であった状がはつきり窺われる。菩提山へ行つたところが、昨日会つた(倉本注：寛政十一年四月四日に宣長・大平が神宮文殿を訪うて経雅に面会し、翌日一門で菩提山逍遙の折り、偶然経雅と会つたことを

指す)翁に「図らず」今日会ったというのは、翁を菩提山へ案内することについて他の門人達から何の相談も受けていなければ、た自身が指図したのでも勿論ない。それかといって図らずも逢えばお互いに喜び合うというような位の間柄で、経雅卿自身も翁を学問上における尊敬すべき先輩としてこれを崇め、翁は畏くも皇大神宮に奉仕する身分高き祠官として十分に尊敬を尽くしていた事がわかるのである。

以上の如き説で大体正鵠を射ているのであるが、先にものした拙文で触れた通り、経雅と宣長との関係は、時期を経るに従い微妙に変化していることに注意しなければならない。その変化について少し検討をしておかないと、二人の関係について何か釈然とせぬものが残ったり、友好関係が表面的な、これまでの行きがかり上、義理合いで漫然と続いているものになったかのような誤解を生じるともかぎらない。その点、前回紹介した画僧・月僊との友情とは全く質を異にする関係なのであり、対照的な意味で興味深いところでもあろう。

さて、宣長と経雅との関わりを検討するに当たって、『経雅卿雑記』の記録以前については宣長の書簡が格好の資料となる。筑摩書房版『本居宣長全集』の第十七巻と別巻三にそれらが集成されている。そこから今重要と思われる書簡類を掲げてみよう(漢字表記を現行の字体に改めさせていただいたことをお断りしてお

く)。

① 天明二年二月十四日 宣長から経雅宛

先日は貴辺へ療用ニ罷越候処、帰路差急キ候品有之候故、得御尋不申上、残懷不少候。蓬萊公へハちよと御尋申、乍早々得御意候。(前後省略)

療用とは往診のこと。蓬萊公は荒木田尚賢のことで、天明八年に没するまで宣長と経雅との媒介役を務めていた。内宮権禰宜で御師職としては蓬萊大夫を称し、谷川士清について学び、真淵とも交流があった。『授業門人姓名略』によれば天明七年宣長入門となつている。この書簡より以前、安永年間に、経雅は『大神宮儀式解』執筆にあたって宣長と頻繁に往信しており、尚賢とともに宣長の序文をも得ている。よって宣長が山田辺に来た折りに訪問してもおかしくない間柄である。本書簡で宣長が尚賢訪問を優先した第一の理由は、宣長の中で尚賢の方に学友としてより重きがおかれていたということになる。実際同年三月二日にも宣長は尚賢を訪問、その時は相手の都合で面会がかなわなかった(北岡四郎「蓬萊尚賢の伝」。初出は「皇學館大学紀要」第八輯(昭和四十五年)。後に『近世国学者の研究』(平成八年 皇學館大学出版部)に所収)。

尚賢—宣長交友が始まったのはいつごろからか。尚賢は安永二年に宣長を訪ね、『古事記伝』稿本巻一之上を借り受け、以降次々筆写、宣長も尚賢に意見を求めていた。本経雅宛て書簡には蓬萊に稿本を送ったから一覽してほしいとも書いてある(但し先の引用からは省略)。「中川経雅卿年譜」(大神宮叢書『大神宮儀式解・外宮儀式解』付録 昭和十年)によれば、経雅も安永三年、蓬萊から得た『古事記伝』稿本第一巻を写しているから、尚賢—宣長ラインができて、そう間をおかずに宣長との仲介を得たのであろう。

宣長が経雅と比するに尚賢との交友をより重しとしたのは、直接訪問を受けて肝胆相照らした時期の先後によるものと考えられる。ただし経雅を介して尚賢に伝信した例が安永八年、天明二年にあるから、宣長の中で、山田の二人との交友のあり方に、殊更大きな差別を設けていたわけではあるまい。

② 天明二年二月廿四日 経雅から宣長宛

尚々、御同姓及稲掛性へ、宜同人行奉頼候。別々ハ不申上候、以上。(本文省略)

「稲掛性」は大平のことで、全集では経雅—宣長間の書簡中に大平が登場する初出例である。宣長宛ての書簡で、ついでながら大

平の安否を尋ねることに留意された。この頃、経雅は宣長の『古事記伝』を蓬萊経由で写していた。

③ 天明三年十月二日 宣長より経雅宛

誠に爾来は御尋も不申上、御病中故指扣、蓬萊公迄御様子御尋申上候処、追々御快復之御趣承知仕り、大慶仕候：尚々、いつぞや参上仕候節ハ、兼而御約束之文台御患被下、千万忝奉存候。(前後省略)

経雅の自叙伝である『慈齋真語』によれば、彼は天明三年七月十一日より所労の積りにより発病、一時は重篤なる状態に到った。病中数人の医師が往診しているが、その中に宣長がいる。文中、「いつぞや参上仕り」というのは、その往診の際を指す可能性が高く、文台は形見というより、そうした雅品を礼物も兼ねて与えるほどに、病状が落ち着いていたと考える方がよからう。ちなみに快復は九月初旬を境にしていた。

④ 寛政元年九月八日 宣長から荒木田末耦宛

(三河から来た門人穂積重野に対し) 神朝廷之古儀等御物語被下候様ニ致度候、右之段五殿などへも御噂被下、御逢

賜り候様ニ御頼被下度奉頼候。

文中「五殿」は経雅。末耦は内宮付属四別宮の一つである風日祈宮の大内人で、師職としては菊屋大夫を名乗り、菊屋兵部としても通る。天明四年鈴屋入門。天明八年尚賢が没して後、経雅と宣長の媒介役として浮上してくる。

⑤ 寛政三年八月十七日 宣長から経雅宛

菊家へも盆前以来未得返事も遣し不申、大ニ無沙汰仕候、同苗方へも御加筆被成下、忝尚又宜申上度由申候、大平石同前ニ御座候。(前後省略)

⑥ 寛政四年正月六日 宣長・春庭から経雅宛

年始状なので本文は省略する。差出人は「本居春庵 宣長」「同 健亭 春庭」となっている。

⑦ 寛政六年五月朔日 宣長・春庭から経雅宛

『雑記』にも引く書簡で、経雅三位昇進状況である。これも差出人は⑥と全く同様に連名。⑥とあわせて注意したいのは、この二通を通じ、宣長の子息・健亭が春庭を名乗ったことが経雅にも知れていたはずであること。実は『雑記』寛政十一年冬の記事に、

鈴屋一門が白川藩常松与左衛門なる人物の四十賀歌を記録している中に、「宣長」とは別に「春庵」という作者名があり、その傍らに小書きで「本居宣長男同健亭歟又別人カ」とある。又享和元年の宣長逝去を受け、悼歌を送った相手を経雅は「男健亭、」とする。後者について、池山氏は、健亭が春庭と名乗ったことを失念したかと書く。それはその通りでよいのであるが、寛政十一年の時点で既に失念していたと考えてよいのだろうか。春庭名で二通の状が到来し、健亭(春庭)を総領と認識しながら、「春庭」を「春庵」と誤っていることにも気づかず「別人カ」と疑問を呈するのはおかしい。この小書きは経雅と別筆の可能性も考慮してよい。実際筆跡が異なるのである。しかしながら経雅が春庭と深い交友関係を有していなかったことは池山氏の指摘を再確認しておいてよい。

さて、本書簡に以下のようにある。

「三位と申候は格別尊貴之御事、是迄之通馴々敷御文通申上候も恐多ク奉存候へ共、年来御心安申承候御事ニ御座候へは、以後迎も、乍失敬不相替可申上候。文言等不敬之義有之候共、真平御宥免被下度、兼而御断申上候」

これを読むと、宣長の敬意からくる遠慮意識が三位昇進によって深く芽生えたのは確かである。寛政六年という『雑記』の記録も残るが、このころには経雅と大平とは書籍を貸借したりと厚情ぶりがうかがえる。ことに⑦書簡の日付である五月一日に、大

平が自ら経雅を訪れ、直接祝いを述べていることも忘れてはならない。

そんなことを念頭におきながら、同年、宣長が和歌山に講義のため招請を受けた際の『雑記』の記事を見てみる。それによると宣長は出立前、紀伊行を経雅に知らせてきたらしい。それに対して、経雅が鈴屋に送った書簡がとりわけ注意される。

稲垣十介大平も被連候。其時大平へ遣し候書状。客中無難ニ可被扨従、且別ニ書状不遣候間、宣長へも宣御祝詞御申入給候様申遣候。

つまり②の書簡とは全く逆のことになっているのである。経雅は一行が松坂帰着の後、大平から紀州行の情報を詳細にわたって得ていること、既に書いた。

大平と経雅の友好関係が醸成されていくに従い、自然と経雅—宣長間に距離がおかれるようになったのであり、それが経雅の三位昇進を機に更に顕著になったことが考えられる。全集では寛政七年八月の書簡以降、宣長から経雅に発信された書簡が見あたらない。経雅から宣長宛て寛政十二年の書簡が載るから、往信が全くなくなったわけではあるまい。しかし大平が尋ねたり、大平と往信することが増えて、宣長—経雅が直接アクセスしあう必要が従来ほどはなくなったのである。だから経雅の方も仲の良い大平

を通して宣長の消息を知り、こちらの消息も知らせるように変わっていく。

こうなっても経雅が宣長に対して抱く深い関心は揺らぐことがなかった。彼は太平から逐一宣長の動向をつかんでいる。それは和学者としてますます名声を高める宣長の学業の充実ぶりと、彼の紹介で一門が経雅のもとを次々来訪することから、敬意と尊崇の念がやむことのなかったゆえである。宣長も寛政七年四月参宮の折には経雅を訪問したし、末耦宅での講義には経雅も連なった。関係が冷却したり疎遠になったのでは決してないのである。

しかしながら、大平との厚情ぶりが顕著な形で記録にあらわれるようになるのならば、これ以上宣長との交友の質を検討することには拘泥する必要はあるまい。自分は経雅中心の神宮文芸サークルを想定している。そのサークルと鈴屋一門の学芸上の交流ぶりに文学史的・文化的意義を見出そうとしている。そのことを証する資料として、今『雑記』を組上にあげているのである。当『雑記』に経雅—大平の厚情ぶりがうかがえる以上、その交友が両サークルの活動の活性化に具体的にどう影響したかを検討していくことが必要と考える。

二

以下『雑記』から大平関係の記事を抜粋する。

① 寛政五年丑十一月廿一日、松坂本町稻懸十介大平より今月十八日出候書状落手。余材抄雜之式延引候而も不苦候。ゆるゆる御写候様申来。

(以下、大平から江戸詰筑前藩士・青柳種満からの書簡を写してきたものを記載。内容は、隠居旗本・大久保西山が千四百部あまりの国書を、蔵書目録とともに幕府に上納したというもの。目録には類聚国史、諸国風土記などの稀書のほか宣長の著作も含まれていたという。)

② 寛政六年五月朔日、松坂稻懸大平参宮之由、立寄申候。本居春庵も四月廿八日名古屋より帰候由。今日予対面

中川神主四座にすすみ給ひて三位の宣旨かうふり給へることを悦び奉りて
大平

色ふかきみつの位にいすゞ川すゝむも神のめくみとそしる右之時あふき干くわし恵給候。

(注) 宣長・春庭連名の祝状が同日の日付にて認められる。宣長帰着は「寛政六年甲寅日記」(筑摩版全集第十六巻 四五七頁)によると十一月十六日。

③ 寛政六年十月 宣長・大平和歌山行関連記事は省略す。

④ (寛政七年卯春の記事)

君のめくみ、本居寛政六年十月紀伊殿よりめされて若山へ参りける紀行也。此時大平同道の紀行名草のはまつとゞいふ。

(注) 筑摩版全集第十八巻の解説に『紀見のめくみ』の題が宣長没後刊本刊行の際に命名されたとするのは、この経雅の記録によって否定される。

⑤ 寛政七乙卯三月松坂本町稻掛十介大平方より本居春庵宣長事、俗称被為改自今中衛と被称候由申来候事。

⑥ 寛政八辰四月十五日、松坂本町稻懸十介より書状并柏や兵助(傍注・書林松坂日野町)より大政詞後釈一部二冊差越。代十三刃之由申候。此序林崎文庫へ同奉納一包二冊差越候。同夜守やへ向相達、受取書差越候様申入。此節大平より末耦へ書状来。早々届呉候様申候而同夜相達候。彼方より使来候間、即附遣候。

(注) 「守や」は守屋徳大夫、磯部昌綱。風日祈宮大内人職。末耦と共に宣長肖像を描かせ、そこに「ししまのやまと心」の有名な歌を

宣長が書したことはよく知られる。守屋は出雲の小篠敏と経雅の媒介になったりしている。また文庫との関係は次の⑦書簡を参照。なお北岡論文中に紹介されている「林崎文庫書籍購求之事」を見ると「執事」三名のうちに「守谷惣大夫」とある。「惣大夫」は「徳大夫」の誤りであろう。

⑦ 寛政八丙辰四月、松坂日野町書肆山口兵助(傍注：柏原兵助事)稲掛利房(執筆者注：太平の誤カ)より林崎文庫へ本居宣長吉拾作六月大祓詞後釈二冊奉附与由申来。予方より文庫書生守屋昌綱へ相渡候処、受文差越候間、同月四月十八日出書状を以受文并太平并柏やへ書状ニ而此受文差遣候。予方へ求候後釈代被頼候人有之。其所へ早々遣候代十三匁。

⑧ 寛政八年五月廿一日、本居宣長門人肥後熊本細川越中守殿家中・長瀬七郎平真幸参宮。本居并稲懸太平より添状。予方へ来、面会。神書・歌書談。予発句五六句書付遣。右面会之事、本居太平等より書状来。返書右之仁へ頼遣。守やへも逢度由申入、添状遣。跡より歌を送給ひ

五十鈴川かはのせきよみ結びあけてあかすも君にわかれぬるかな

(注) 長瀬は寛政五年二月に鈴屋入門。文中「神書」とあるのは、経雅

がかつて『大神宮儀式解』を著したことから神典に通じていたのが知れていたことをあらわす。『儀式解』の貸与や序文を写してほしいなど、『儀式解』著者としての名声は揺るぎなく、宣長・大平から経雅への紹介状を得る門人が長瀬以外にもあった。守屋に会いたがったのは、勿論林崎文庫閲覧を希望してのことである。

⑨ (寛政八年五月。江戸日本橋四丁目箔屋町松平周防屋敷詰めの小篠敏から書簡。三位の着用衣装の考証。敏への返事を) 大平方へ遣し松坂より早便に遣し給候様申入

⑩ (寛政八年) 辰七夕に於本居中衛宣長返書、同八日、菊屋兵部より相逢入手、拝見。予見舞候。返書申候端書ニ 尚々大記方よりも毎々便御座候はても、此節ハ最早道中へ罷出、近日又々此地え参候筈ニ御座候。周防守殿ニも此節帰国。道中ニ而御座候。私も桑名迄罷出、逢被申度由、頼ニ而近日桑名へ参申候。大記ハ又々暫当地ニ逗留候筈ニ御座候。大平も桑名え同道致申候(以下略)

(注) 本書簡解説は『経雅卿雜記』拾遺」にあるが、紙数の都合で書けなかったことを補足しておきたい。七月七日、宣長は出雲大社國造の弟・千家俊信、その弟・勝信宛てに書簡をものしている。その一節に「愚老儀、松平周防守殿帰路桑名ニ而逢被申度由、兼々頼ニ付、彼地ニ而謁見之ため、明日桑名へ罷越申候。依之今日は大二取

込罷在、何事も得不申上候、跡より委細可得貴意候」とある（筑摩版全集第十七卷三二八頁）。多忙を極める中二通をものして翌八日出立。松坂帰着は十二日であった。その七日後の十九日、敏は参宮。守屋昌綱方へ止宿し、そこで面会したと『雑記』にある。敏は二十三日国元へ出立した。ちなみに彼は石見浜田藩儒で松平周防守康定に仕えていた。さる六月二十六日に、「周防守が二十九日江戸を発つ、七月九日桑名着予定なので、そこで逢ってほしい」旨、宣長に手紙をよこした（七月四日付小西春村宛宣長書簡による。全集第十七卷三七頁）。敏と経雅との交友は既に池山論文がまとめているから、これ以上は触れない。なお注冒頭に引いた書簡の受取人・千家俊信は、敏と共に寛政七年九月十八日に経雅に会ったことを書き添えておく。

⑪ 寛政八年丙辰九月廿一日、大平入来。不对面。墨を患候。此序利長作筆、長官ノ歌差遣為進候。

(注) この記事の背景を説明したい。利長は林利長で伊右衛門と通称す。楯の舎号。松坂の人で鈴屋一門である。経雅は、この人物から杉製の筆をもらいうけた。当然そこには号の楯の舎をかけていたのである。それに対して、経雅は六月十一日、長官・経高に一首を要望したのである。それは以下の通りであった（『雑記』）。

神路山の杉管の筆といふを見侍りて

すきはひになすとは見へすすき人の杉もてあやにつくる此筆

経雅は、この歌の短冊を⑩の記事にある大平入来の際、彼に託し、利長に届けたのである。なお経雅が対面しなかったのは体調不良によるものであろう。利長は寛政九年三月下旬から四月初に宣長にも筆を送っており、宣長は四月二日付書簡で返歌と礼を書きおこった。

⑫ 寛政八年辰十月十日、松阪日野町柏屋三郎、本町稻掛十介より今度本居氏門弟中より大祓ノ詞ノ後釈二、神歌詞ノ後釈二、馭戎慨言四、合八冊、文庫へ奉納申度由、書物到来。佐八守訓え相渡、中間へ令披露、受文被遣候様申入候処、到来。

(注) ここにある書物のうち『大祓詞後釈』については、同年四月、既に柏屋・大平から文庫に奉納されていた。今回は本居門弟中とあるから、それとは別であり、他書も含まれていたのである。佐八守訓は井面守訓。その男・守道は佐八定綱の養子となり神官家の名家・佐八家を継いだ。守訓は宣長、守道は春庭門。筆写手元にコピーのある『社家次第』は経雅が従四位下にあるから明和五年から七年までの記録ということになるが、この記録で定綱は従四位上、守訓の父・守純も同じである。この間守訓は二歳から四歳。守訓は後に正三位に昇進、長官を勤めるけれども、彼が佐八家に入家した記録は未見。

守訓は先の守屋昌綱と同じく文庫の執事をしていただけと思われる。

神前へ遺候。

⑬ 寛政九年巳正月朔日、松坂本町稲垣十介大平うぶすなの社に
まうて、

さすしほのみちのはしめとすみのえのさか行末をいのるけ
ふかな

(注) この記事によって先の高本が真幸と鈴屋に同行していたことがわ
かる。『音信到来帳』(筑摩版全集第二十卷三四八頁)によれば、翌
六日、真幸は宣長に「たんさく」をもたらしている。

(続く)

⑭ 寛政九丁巳四月朔日、松坂本町稲垣十介大平か書状。今度肥
後侯儒臣高本慶蔵と申者来、今日参宮、貴家えも御近付ニ相
成度由。仍書状を以頼上候。御逢可被下候。且林崎文庫拝見
申度由、守屋徳大夫昌綱子え被申入、拜見可被仰付候由也。
仍右之人え面会申処、丁寧也。右高本氏は朝鮮人の子孫ニ而
代々肥後侯ニ仕候。近来御国の学問出精之由申来候。

原本閲覧の便宜を図って頂いた神宮文庫に多大なる謝意を表す
る。

(注) 高本氏は三月三十日宣長を訪問。国府たばこ一箱と筆二対を贈
り、宣長・大平と歌を詠み交わした(筑摩版全集第十七卷六七九
頁)。

⑮ 寛政九丁巳四月五日、松坂田丸屋十介大平同道、肥後熊本細
川越中守殿家中・長瀬七郎真幸入来。去年寛政八年五月廿一
日入来。始而面話申候。同学等何角相談、件時任望、予詠歌
二、発句一、短冊二書遣候。御初尾銀札三枚。大平墨等差出
候。神前へ直々上候様申入候処、参宮相済候由也。仍預り置